

Monto Kaj Neĝo

Monata Organo de Monta kaj Neĝa Clubo.

# 山 と 雪

第 一 號



札幌 山 と 雪 の 會 發行

昭和六年十月發行

第一號目次



登山に就て

カール・ルーター

〔一〕

天狗岳

坂本直行

〔四〕

山を見る

井田清

〔七〕

雪 鹿

宇都宮嵩

〔三〕

デイスタンスレースの練習法に就て

高橋昂

〔二〕

第二回御來道記念大會の距離競技に關して

高橋昂

〔六〕

全日本選手權大會に臨みて (三)

高橋昂

〔四〕

◆ 雜 錄

寫 眞

美 瑛 岳

佐々保雄

大聖寺上より見た西行内岳

栃内吉彦

圖 版

天狗澤入口附近より見たる天狗山

坂本直行

第二回御來道記念大會距離競技コース圖





美 瑛 岳

佐々保雄

## 山登りについて

カール・ルター

素より登山者にとつて探るべき道は只一つ、則ち登高ウツフレンハイテあるのみであります。この事は獨逸語の「山登り」と謂ふ言葉に明瞭に現はされて居ります。「すべてのものよりもより高く」ありたいと言ふ心持は誰しも先づ懐く本能なのですが、その何物よりも高き處にこそ登山家にとつての「いと高き處」があるのであります。より高き彼方へ——そこに到つて始めて何處じつこの潤き平原をも底地をも瞰下することが出来ますし、おほらかな廣きかなたまでが、我々の眼の前に、そして想ひの前に自らを展べ擴げて参ります。そして人の世や、日々の俗事や、世間の出来事や、知識、權力等から全く「超越」したより高き所にあると言ふ觀念をシツカリと擲むことが出来、又それをハツキリと感じ得るのであります。

高山岳に於ける登山では、常に次に來るべきより高き地點へ、又はより高く聳ゆるものへと目指すのが常なのですが、一方、下降ウツシに當つても又、測らざる最高記録を造るべく餘儀なくされることがあり、或ひはそれが當面の問題であることさへもありません。此は例へば頂嶺の通過や山脈の横斷に際しての如き場合に起り、其の時に於ける下降と言ふ事は文献や偵察に依つて前以て豫知し得ますし、且つその登山の最も批評さるべき點にもなるのであります。又その故に、かかる山旅に於いては、困難で嘗て誰も「やつた」エツタことのない下降に成功することを目的ともなし得るのです。しかし兎も角登山に於いては、實際の最高潮、則ち絶頂への登高に對して、下降する事は確かに終曲を意味するのみであります。



山岳の、特に太初よりの岩石より成り、氷河にて蔽はれた高山の頂は實に地球の「高極」<sup>ハイポイント</sup>とも言ひつべきでありまして孤聳し、人環を離れ、蒼氷と寒冷とはかの極地と同じやうに其處を占めて居ります。又其處は靜寂そのもの、且この世ならぬ清純の聖域でありまして、人々は如何に永き間、留らうとも汚すこと能はざる、又それに對してあらゆる憧憬を以て魅き付けられる處女性を保つて居るのです。世界の高極、エツエレストへの争鬪は北極や南極への身を賭しての苦鬪と同じ様に人々の血を湧かしたことでした。

よく拓かれた土地は最早や何等の神秘的なものをも有せず、又既に經驗せることは更に幾何の啓發をも齎しませぬ。古きものは全く早や何物をも藏する所ないのであります。さりながら山のみは尙ほ若いのです。万有を創造した力は今に於いて尙、絶えず働いて居ります。登山者は其のちから、いつも抗争せねばなりません。山々は活き、語り、働いて居りまして、落石、雪崩を以て其の身を護つて居るのです。アルプスの高山に於ける經驗に對しての凡ゆる手段や方法は何れも侵蝕や、風化や氣候の變化に依る地上變遷の法則に支配され、服従させられて居る任末です。斯の如くして山々は相手に對するのです。その故に登山者は個人的な關係に於いて自らを處さねばならぬのです。争鬪と言はれるのも誇張なき明白な事實であり、生命を賭すると言ふも又言葉通りなのであります。かゝる時は、亦手や足は岩場に於いて震へ、又滑らかに氷結した山稜や張り出した胸壁は蟲けらのやうな人間は振り落さうとさへします。登山者の意志よ——なほ彌高きに在るのであります。——則ち多くの平凡な、そこらにざらに在る登山家の反對にも拘らず言ひますならば、是はスポーツ的な内容を持つもの、少くとも案内者を用ひぬ登山に於いて特に感じ得る處の觀念なのです。之の考へに對しては屢々反對が述べられてゐますが、それはスポーツは鬪ひ也と言ふ問題の核心に對して言はれるのではなく、スポーツ的な概念の中にアルピニスムスの位置を求むる事に對して、或ひはせい／＼その淺薄な又は墮落した一面に向つて言はれてゐるのでありませう。

獨逸や其の近隣アルプスに於けるかゝる争闘が獨逸人の冒險心を今尙ほあふり、且つそゝり、其の影響が全獨逸民族を完成すると言ふことは我々にとつて實に幸福なことでありませう。ヘンリー・ヘックがスポーツに於ける危険や冒險に關して「國民はその子孫等の一見無意味の様な冒險心によつて偉大に且つ力強きものとならう。しかし若し彼等の子供等が危険に對する喜びを失つた暁には、その國民は滅亡し衰退するに至るであらう」と述べたことは、特にその山岳に於ける争闘について考へても眞理と見做されるのであります。(一九三一・八・ミュンヘンにて)





# 天 狗 岳

坂 本 直 行

札幌近郊のどの山に登つてみても、いつも天狗岳（一、一四四米）の怪異な姿が眼をひく。附近のなだらかな山々に圍まれて、獨り異端者の如くかまえてゐる。

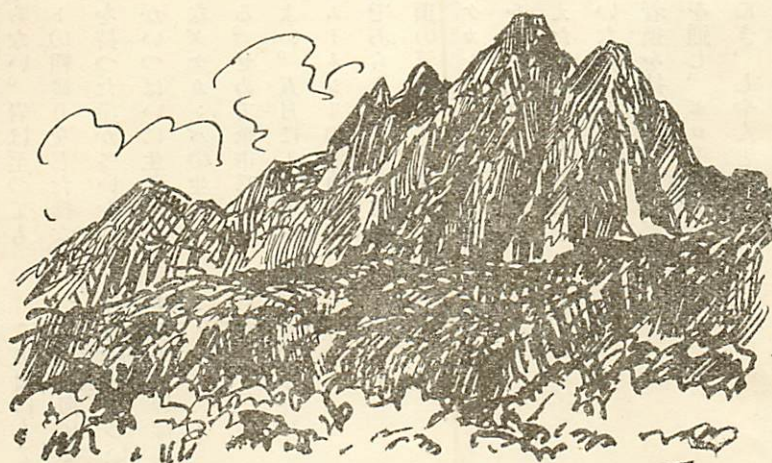
手稻から見るとちやうどラクダの様だけれども、烏帽子岳からみると、小樽内川の溪を深く挟んで見るので、あの崖はなか／＼大きく立派に見える。長尾山・ムイネシリあたりから見ると、小樽内川を下つて、一日のんびりとした山歩きの時、小樽内川の橋の邊りから森林の上に、ちよつと頭だけ出てゐるのを見るのは好きだ。又植物學的に云つても、一わたり調査しても相當の收穫がある程に豊富だ。崖の間やガレには美しい草地をたくさん持つてゐる。

登路は至つて簡單である。興味の點から云へば小樽内川の方の天狗澤（五分分の一に記入無し）から登る方が面白い。白井川の方から登るのは時間から云つて、一時間一時間半位は多くかゝるけれども又距離も長い、この方が面白い。冬季のスキー登山は既に何度も行はれてゐる。一九二九年二月十日北大山岳部の板橋卓氏他二名等に依つて初登行が行はれた。スキー登山の場合は皆北側即ち小樽内川の天狗澤からのみ行はれてゐる。それといふのも南側の白井川に橋が無かつたからだ。昨年からはツリ橋が出来たからこの方からもつと樂に登り得るであらう。いづれにしても最後の急斜面はスキー使用不可能であるからトゲのあるワカンジキを必要とする。アイゼンをはいてワカンジキ

をれば尙樂かも知れない。頂上の直ぐ南東の側に細い谿  
が一直線に白井川の側に走つて  
登頂は最も興味あるものと思つて  
る。ザイルとアイゼンとの面白  
い登行が行はれると思ふ。一度行  
てつみたいと思つてゐる。

この谿は兩側は崖で巾は至つて  
狭いし、それに相當の長さを持つ  
てゐるから、登路としては一番痛  
快であらう。冬でも夏でも一日行  
程としては樂で、札幌近郊では最  
も面白い處だと思ふ、豊平を一番  
電車で行けば十二時には樂に頂  
上に達する事が出来る。

五月の頃など、ゾムメルスキー  
で登りに行くのは愉快な事だ。四  
月下旬、五月上旬と云へばもう豊  
平川の崖には、モイワナヅナが白く咲き、路傍にはエンゴ



白井川に見る花の群。 1930.9.21.

N. SAKAMOTO

サクの淡青の花がちらばつてゐる頃で、この時分はもう南  
側ではスキー使用不可能ではある  
が、北側の天狗澤はまだく／＼豊富  
に雪を持つてゐるから、アイゼン  
をはいてスキーをかつきあけるの  
だ。天狗澤を少し溯ると頂上と第  
二峰（一、一一七米）がみえる。そ  
の雪消えの様子はなか／＼よい。  
ちよつと高山的氣分もあるし、南  
側からみるのとは打つて變つてい  
くのだ。澤の北側の日常りにはカ  
タクリの花が群落を爲して咲いて  
ゐるのは、全くすばらしい。スキ  
ーをはいてこの花の群をながめる  
といふ事はたしかに氣持のいい事  
だ。

轉倒すれば、相當の高さをスリ  
ップして行くであらうやうな、急  
角度の、あの廣い谿頭から澤をめがけて、やたらに小さな



スラロームで降つて行く愉快さは又格別なものだ。

然しこの山は岩登りの對照にはならない。岩は至つてもろいし、それに崖はちようどセメントの粗塗りをした様なザラ／＼とした、のつぺりとした面を持つた崖が多いからだ。又頂に立つて見ると、ブツシユがいつぱいに生えてゐたり、第二、第三の岩塔の上に大きなダケカンバの生えてゐる様なのはいさゝか幻滅の感がある。せめて余市岳位の高さがあつたらと思ふ。然し眺めはよい。五月に入つても殆んど純白の余市岳・白井岳や、又ムイネシリの連山の廣大なる眺めはこの山での一番の眺望であらう。又邊りに山がせまつてゐないのでカラリとした頂の氣持を味ひ得るのや、岩のやせた尾根の上に生えたダケカンバの疎林中の草地等は、この山の取得だ。そして又山を降れば定山溪の風呂がある。一日の行に心よき疲勞を覺えた手足を、温泉にひたつてのび／＼と延し得るのは、大いなるよろこびだ。だからこの山に登りに行く時は、必ず着換を持つて行く事だ。一風呂あびて乾いたワイシャツに手を通し、ボロ上着をリュックに押込んで、汗ばんだ靴下をぬぎ、しやんとする時の氣持は實になんとも云へないのだ。着換を持つて來ない

友は必ずくやしがるに決つてゐる。

この山にもアイヌの呼稱があるであらうが、一度も聞かない。天狗岳では如何にも平々凡々だ。何とかいゝひどきの名前がほしいものだ。もつとも見た處いかさま天狗でも住まふかの様な姿はしてゐるけれど。



# 山を 見 る

井 田 清

*Cela, cela ne sera rien,*

——それ、それは何んでもない事だ——

自分は山からほんとうに自分の生きたといふ喜びを汲み

たい、山の事を想ふと自分の裏には烈しいものがあつてそれがあらん限りの力で山に向つて生き抜きたいと願ふ、山から自分の生涯の姿や自分の日々の動きをしつかり裏附ける大きな自分への「領き」が愆しい、その領きと安心の中で自分はもつともつと山を見たい。

自分の心は山をほんとうに見て居るだらうか自分の眼は自然を多く見た。眼を見開き季節の喜びを追ひ周囲を見廻しては居たが感ずべき清らかなもの生々としたもの貴いものを確に感得して居たか。自分は寧ろ無造作に樂々と自然を眺め又山をも眺め過してゐたのではなかつたか、眼は見開いてゐるが餘りにも感度を失つた心を後生大事に守つて

居たのではなかつたか。

心がもつともつと山に睨んで呉れなければ自分にはまだ山が見えない見る事が出来ない様な心持がする、だが眼を閉ぢても山の相は尙險の奥から消えずに居る。心の奥には山の残して行つた魂の音楽や熱い烈しい魂のいきぶきが聞える。自分は心だけになつて山の事を考へる、裏には烈しくむくれ上るものを感じる。それは自分を支配してゐる生命だ、山が自分を支配し自分の内と外に向つて何かの表現を以つて表はれて來るのだ。山の方だ自分の生命だ。

心が山をつかみ山が自分をとらへたその時に自分と山とは區別がなくなつて終ふ。山が自分といふもう一つの幻の様なものになつて自分の心の裏に在る。それを自分は内約



的根元力だと獨りで思つて居るのだ。自分には畫がかけないがその山を自分は自畫像として大事にして居る。「自分」の靜物畫だ。色々と相の變る様で少しも變らない一途な自分だ。

山に登るのも山を下つて遠くから眺めるのも心うれしい事だ。

自分が山を凝視する世界に這入り込む事は自分の衷にある世界を表現する事だとそう自分には思はれる。「俺の山が俺の腹の中で何を言ひたがつて居るのか」自分はこれから言はうと思ふ、だが言ひ切れない事や言つてはならない事がある矢張り自分は山といふ「靜物」を心に畫き乍ら生き様、力一杯生き様と思ふ。

山を一心に見入る人の眼つきが考へられる、それは「自分」に見入つて居るのだ。日々の生活の中から山を想ふ人の姿を考へる、遠近を脱して山の呼吸を身近に感じ喜ぶ人間の心は「一が二となつた」とニイチエを呼ばしたではないか (Da, plötzlich, Fremd; wurde eins zu zwei, - Maria 56)

色々な思ひをこめて山を見る瞳や心のある事を想ふ、そ

して衷をふりむく時に其處に見出される山の深い傷—自分の心は深手を負つて居る。聖痕<sup>スレキ</sup>ではない。山が自分に切りつけた深い傷だ、うづく程深い痛い心の奥の靜けさだ。

山歩きの事を考へると自分は本能で体中があふれて終ひはしないかと思ふ。

岩、土、氷、雪、霧、谷間、山里—。限りない山にはほひが僕の血をわきたたせるその不思議と靜かな深傷なのだ古くも新しくもない傷、自分はそれにふれると俺は自分の言葉でその事を書きたいと思ふ。自分にはとても書き切れない事を知つてゐるから一生書き通す、自分の見た山に俺は俺で迫つて行つてやるとさう思ふ。

黒い山壁のかたさを見て居ると、黒い光る岩壁を見て居ると自分の心は一番素直になるのだ。山間の流れの様に小さくはあるが堂々と流れたくなるのだ。山の美しさは自分と自分の生きる事の間で或落ちついた「領き」に似た心持を啓<sup>ひら</sup>せて呉れたのだ。

峰にひとり立つと心は平素の自負傲慢をかなぐり棄てて平凡な凡ての存在に向つて限りない親しみをそぐ、賑やかな心持になり凡てを抱きたい心持になり拜みたい氣持

になり知らず知らずの間に心の中では頭をたれて居る、外では時間の觀念がもたえ見知らぬ心の深味をみせられる。

山といふ深傷をたたけば何んだかピンと響きわたりさうだ  
自分にはイデオロギーも何タイズムもない様だ、辭書的  
感覺で色々な術語を並べ乍ら山の事を語るのも自分には出  
來さうにない、山登りの行動を理論づけるにも自分には駄  
目だ。

或は理論づけるといふよりは登山遊技といふ様な術語に  
よつて少しばかり仔細顔に説明したり解釋して見たりする  
事が流行るのかもしれない。むしろそれらは山よりも社會  
科學に用ひられる、術語の語彙的好奇に心を奪はれてゐる  
のかもしれないと思ふと、全くそれは自分に縁遠い事の様  
だ。そんな古臭い自分だが心の中では山を主張したいと思  
ふが、自分には出来ないから想ふだけでも烈しく自分相應  
の力でガン張るより仕方ない。だが自分の内の火の怖しさ  
はよく知つて居るつもりだ。

そして何か自分が怒りや皮肉や小さないたづらな心を感  
じた時は山にひとりでねむつた夜の事を思ひ出す様にして  
居る。山のおもひはそれらの拙い小さな日々の心を譯けも

なく吹き消すのに充分だ。山で吹雪かれるとまつしぐらに  
なる心の事を思ひ出して、自分は色々な毎日々々のいやな  
感情から遁れる事に段々慣れて來た。或は又いやな感情も  
ちつと普通よりは暖い心持でにらめる事が出来る様になつ  
て來たと思ふ。山を見る事は自分には生きる事だ。

併し自分は「自分で食へない」生活にひけめ以上の重石  
をのせられたあがきを毎日苦々しく嚙んで居る、生きる事  
なしに生活して居るといふ心の中で、缺けた瀬戸物の様な  
使ひたいが使へない氣まづさに似た心持が、自分自身には  
苦しさになつて心のアチコチをザラザラ搔き廻して居るの  
だ。山を見る事は自分には生きる事だがさうして居ては食  
へない、食へる仕事が愆しいのだがない。その事で自分は  
何か他人に打ち開けられないものを感ずる、丁度喜びでも  
苦しみでも自分の考へでも他人に打ち明け難い他人と分つ  
ことの出来ないものがある様に、他人といふ暗い寂しい心  
持が自分に心を掩つて終へとさゝやく事さある。そして  
一人で山の事を夢みる自分一人で苦しむ、やつとこれが最  
後ではないのかと思はれる安息のなかに住ふ、そんな時よ  
く自分は思ひ出す、アイヘンドルフの聖い住家 (Andächtig)



ger Aufenthalt) といふ事。自分の衷には何一つとして山に自分の孤獨を打ち明ける事を禁ずるものがない。

自分のうちの獨語がやがて山との對電となつてやつと其處に自分らしい住家を見出す事が出来た様だ。

(1) 「神のお許によつてわたしの一生が軽い旅の汗に濡れつつ此のやうな朝旅があればいいが」といふ Edward Mordke の事も考へて見た。想つて見た。

長い回想の後に 'Ich chaos,' といふ表題を乗せて 'ich selbst,' としたとやう書いて居る Hans Morgenhaier の事だ。たつた六年間の登山生活ではあつたがあつた様に山に親しみなげだ。彼の事を想ふと故人ではあるが、そして皮肉屋であつたといふが、彼のやさしい心にそつとふれさせてもらひたい情にかられるのだ。

好きな山の本を讀んで居るとどうも自分の心は獨逸系の人々の心にひかれる。英國人は何んとなく山の紳士といふ感じがして來たり山の英雄といふ様な氣持をふと何處かで感じさせられる、好けない。それにつけても山を登る事が何故こんなに所謂スポーツ的であるのか、口を開けた見物人に登山家といふ遊民？は何故自信のある媚を投げかけて居

るのか、登られた山々の數を競技のレコードの様にならぬか、めやうとする男があるのか、何故山を科學の臺所としなければ「見かけ」が作れないのか、自分などには全くわからない。唯人間が草や木や石や星に名前をつけた無鐵砲さだけには合點がゆくのだ。だから自分は山を食べて自分らしい静物畫を心に一杯畫かうと思ふより仕方ない。自分は古臭いのもかもしれない。

自分の胸の中でも心臓はどき／＼して居る。若い漂泊の慾だつてある。

私の胸の中で心臓がどき／＼する

若い漂泊の慾はあるけれど

郷里に歸つて遠く雪を頂く山脈が

甘い青頭巾をして聳えてゐるのを見る時

おゝ偉い靜かな輝きだ

(藤森秀夫氏譯)

(Conrad F. Meyer: — Finnlucht + 1)

自分は自分の心に歸りつきたい、山の見える瞳は互に感じ合つて居るだらう、その奥に祈りが潜んでゐなければ耐え生きる事の出来ない自然の事を。

共に泣き共に喜び苦しむ無数の瞳のために何かを見張つて自分は自分に命を賭ける、山に命と願をかける。

自分のこの山を他の何かで置きかへても同じことだ、君の仕事―君の繪君の詩―君の音楽……等。

そして眼をつむると自分には遠い所に登つた事はないが親しい懐しい山々が見える、それは小さくとも偉い輝きで光つて居る。

私は死ぬ前に

郷里のために何が出来やう

死を生延びるやうな事をしてやるとしたら

それは恐らく一つの言葉一つの小唄だ

ちつほけな静かな輝きだ

(藤森秀夫氏譯)

(同前より)

その山を見て居ると自分の心の裡に山を登つて居る時よりも烈しい熱い「自分」で一杯になつて来る。晝は晝けな方がいい晝を見てゐると自分が晝いた様なうれしさでたまらなくなるのと同じ様な心持がする寂しくもある。丁度登りたい山へ行けないその心のあきらめといつたものにもよる似て居るのだ、だから自分はずとく山が見たい、登

れば登りたい登れなくても登れても山に自分は自分の命でぶつかつて行きたい、山が自分を見るのをやめない限り自分は山をにらめ通す。死んだら草や木や石も標本にしたが人間の心を自分にも使つてもらひたい。何處か地球玉のむくれ上つた山の見える野原に嘗つては樹を伐る事さへ出来なくなつた自分、腕や心を埋めて地球の玉へせめてもの恩返しにして愆しいものだ。

さう思ふと矢張り自分の心の裡には山の様な感情のむくれ上りがあつてそれが山を見たがり何か自分で自分のものをつくりたがつて居るのだと思ふ。

だから自分は散歩も岩登りも好きだ、凍えてつる／＼に這る岩登りは尙好きだ。体中で心全体で山をつかむと心の中ではいつも見知らぬ命がたくましく頭をもたけて来る、すると自分はその事を自分の力で書き表はして見るのだ。

山を見て居る様な心持で自分は自分をよそ事のやうに取扱ひ乍らしつかとそれに喰ひ込んで行きたい、何時何處でどうあらうと自分には山が見えるのだが當り前の事だ。自分は自分に見える唯一のこの道を出徑の様に鈍重に歩いて行かうと思ふ。(一九三二一〇・四)

(Eduard Morike, "Furzreise" ひとり旅より)



# 雪 庇

宇 都 宮 嵩

スキー山地を歩く時に常に見出されるものゝ一つに此の雪庇がある。此れは一般に考慮される以上色々の意味に重大な影響を及すものであつて、軽視出来ないものである。

此れまで多くの事件を見る中に雪庇に間接なり、直接なりに影響を被るものが相当ある。そう云ふ意味に於て此處では單なる雪庇としての觀念でなく、雪庇の實質的な方面からして、少し研究して見たい。

## a. 雪庇の生ずる原因

屋根、頂き地方に雪が降雪期に常風に吹かれて、反對側即ちリーザイテンに雪が附着して次第にその巾を増し、恰も家の庇の如き形をなす。此れを雪庇と呼ぶ。之は山稜を

越した風は彼の水流中に障害物生じ、渦を起すときと同じ關係を有し、その渦卷狀の氣流は山稜の風陰側で、下より上に回轉するもので、その爲めにドーム形の曲線面を内側に生じその上部先端は突出したものを型作る。

次に此の雪庇は山の大きさ、風の強弱(常風)他の連脈との關係位置等に依りて型の大小異變を生ずる。例へば、

一、三角山一帯の雪庇について觀察すると

三角山の三角柱のある東面は例年の様に雪庇を作つてゐるが、此れに依つてその年の風の強弱並に風向を觀察することが出来る。彼の三角山に於ては雪庇は必ず例年の如く東面に雪庇を作る。此れは常風が北西風を意味するものである。次にその形の狀態を見ると、(1)生じたる雪庇が餘り

硬化してゐない、(2)形が小である、の二點が實現さる。此の第一の不硬化は何を意味するかと云ふに、それは常に雪庇が變化、即ち風の中心方向が一定せないことを意味する加ふるに此の一帶は樹木少きが故に旋風の變化し、硬化に至るまで持續せざることに起因する。又冬期晝夜の温度の變化の差が割合に小なる爲めに硬化せざるものとも云ひ得る。

形の小さなことは第一の説明にて自ら了解出来る。而して三角山はその型單純にして頂上から發する尾根が只二方向(北南)に走るに過ぎないし、各傾斜面が相似型を有し西北部及び東部が平地を呈する故に雪庇が頂上附近は前記の如く弱小なるが、頂上より少し南面に走る尾根を十米餘降ると頂上より大きい雪庇を見出し得る。これも毎年見ることである。これは高倉山に行く尾根傳ひを、西北部二帯の風が縮少壓せられて流れる故にして、特にその腰部の所に大なるものを生ずるのは恰も廣大なる水流地より、狭小なる所に來る水量が飛流するが如き作用を呈するものにして、雪庇の量も増大し可なり大きなものを作る。

## 二、百松澤山(三段)

百松澤の雪庇は(1)の場合と大分其の趣きを異にしてゐる。一概にそれを説明すると、周圍の峰續きの關係と、樹林の群生に依るものに起因するものにして、即ち砥石山への連尾根と東方に横たわる尾根との中間に發寒川の發地を構成し、常に風が北風又は北西風なるが故に、又樹林の爲め相互旋風を防止する關係上斯様な硬化雪庇を構成する。然し澤の構成關係上ある變化を急激に催すことがある。それは南風の突風に依りて生ずるものである。大抵は一定の標準のもとで範置構作されるのは前述の如し。

次に雪庇が生ずる範圍に於てもその稜の形狀にてその大小或は皆無と云つても差し支へない場所が出来る。例へばある尾根續きが下降してゐる一部分に若し階段狀を呈し些少なりとも水平線に近い一つの凹みを有してゐると、そのリーザイテンには雪庇を見ることは殆んど無い。若しも其處に雪庇を見出した場合でも極く小さいもので、他との相關的位置の關係上生ずる場合である。此の水平的個所は氣流が渦を生ずることなく流れるに依るものにして、彼の水流中に二三の障害物ある場合に、その障害物と他障害物との中間の所は水の停止能力を受けずして渦流する如く、此



の尾根の凹狀部に於ける關係は全くこれと同一と見て差し支へない。

斯様な見地よりして我等が雪庇を切り抜けて進む場合に、も此の關係を熟視してゐると、案外手間取れずに進捗することが出来る。此れは案外度外視されてゐる様で、中には雪庇に取り付いて始めて切り抜けて出来ず躊躇することが見せつけられる。又此れは雪崩と深い關係を持つてゐるから考慮を要する。

雪庇の成因は總て自然物理現象に依るものにして、降雪と風向との相關關係を常に有するものと考へるからには、容易に前述の事柄も又實際にスキー登行する場合も躊躇なく理解し得ることと思ふ。

### b. 雪庇と雪崩との關係

今更これに關して云々する必要もあるまいが、北海道地方に於ける一般的實例を材料として説明する。

雪崩の原因並にその所謂發動に對する簡單な説明は「山と雪」に述べたがこれがどう雪庇との因果關係を有するかを見るに、まづ第一に、

嘗つて生じたる所の雪庇に對して、次の靜かなる降雪をみた場合に、若しフィリンシユニーが稍硬化した場合に於ては必ず表層雪崩の滑動條件を備へてゐる。良く我々が春先きに雪庇の下方を横斷する時に、下が硬化してゐると上層の柔い雪は少しの作用に依りても、滑動し、雪は下方一帯に沈下するを見る。

第一の場合に於て若し降雪同時に常風が吹いた場合は雪庇の先端は増大し、下方一帯はシユニーベエーンを生ずる故にその横斷面は必ず原型より凸狀を呈する。故にその凸狀部は動的因子に依りて容易に滑動し始める。此れは斜面を非常に變化する事ある故に餘程注意を要し、案外不意に押し降すことがあるから充分斜面の形狀を探索する必要がある。

次に若し崩雪が硬化しない場合に於て新降雪を見たときには、其れとの合着力がたやすく滑動しがたきものであつて、此の場合は勿論冬期に於てのスキー登行も安定なものである。

此の第三の場合が春先きになると往々變形することがある。北海道でよく見られるのであるが、それは下層面が草

類又は筐類、或は細かい灌木だつた面に降雪し、第三の要件を具備してゐる時には春先きに雪庇下方に水平的なりツセを見る。此れは次ぎ次ぎの降雪が一塊となつて下層面に對し壓する爲めにして、下層面との摩擦少きため雪庇下方の降雪量の爲めリツセを一帶に生ずる。但し雪庇部分は互の凝集力強大にして、下方部との連絡位置になくて下方滑動したとは云へ上部は（雪庇）を残留する。北海道地方で春先きにこのリツセを所々に見出すが、初めてその場所に出會した人はある一種の不安を感じる。勿論此れは危険視さる可き所なるが、僕の經驗した所から考へると、前述の第二の場合よりずつと危険所が少いのである。何となれば此のリツセを生じた所は山腹の下方一帶は基礎づけられたる土臺の如き硬固したものととなる。此れは上部の壓迫の爲めであつて、リツセを生じたる下方一帶は充實した凝集された雪となるからである。その爲めリツセ下方をスキーで踏んでも、滑動し難きものとなり、往々その場所を通過するとき非常に恐怖を抱くことがあるが、その心配は斜面の角度と澤との關係が急激なる時に抱くものにして、北海道の多くの斜面に於ては斯様な所は少い。

而して此のリツセを生ずる斜面を此處に雪庇とのみ關係づけずして少し記述したいことがある。それはこのリツセの生じたる斜面の方位である。此れは仲々面白い現象の様に思はれる。但し北海道のことであるが、多く東面或は東南面で見られる。此れも前雪と新降雪との關係が第三の場合の様な結果を示す所以にあるが、只最も主因をなすは下層面の状態如何にして、筐類の如きものを以て斜面が形づけられてある場合には、その特徴を充分に發揮する而して次に此のリツセが時に依りて底雪崩れを生ずることがある。これは勿論日中の午後によく起る事件にして、午前中には見ること少い。これは下層面と、降雪面との中間層が滑動し易き状態を呈する時、即ち午後二時乃至五時までの間に、溶解した雪が一種の滑動となる所以にある。錢函峠に行く時に毎年小さい底雪崩の實例が見られる（春時）此れも其の理由に依る。

大分雪庇としての關係より遠視されたが、ある一定の條件のもとで必ずかゝる實例はあるものにして、決して不意に發動することはないものである故、只各自の注意力を如何に拂ふかと重大なことである。未然に防ぎ、善く合法的



に研究することが何より必要なことであると思ふ。

### c. 雪庇と方位（北海道を主とす）

リーザイテンは多くは直射光線弱く晝夜の温度の變化少く、庇の變化も随つて少い。これは冬の常風は西風或は北西風に依るものにして、リーザイテンは東面に多く形成されるものである。而して東面に於ける降雪と、それに伴ふ地層の變化は前記三の場合の現象と做す。然しながらこれもその面に對する尾根との關係、澤の形狀にて一概に結論を與へること出來ざるものである。反射光線を受けやすい東面に於ては雪質の變化稍々南面に於けるが如き觀を呈し、次の如き結果を生ずるに至る。

リーザイテンが南方に生じたる場合は晝夜の温度の變化大にして雪質は常に不定にして、晝はナツシユシユネーを呈し、夜はその雪は凍化する爲めに雪質は一種のザラメ狀を呈す。それが爲めに其處に新雪を見た場合は、その接觸點に必ず一つの層を形成する。故に上部新雪は滑動し易い状態となる。

澤の關係上北面にリーザイテンを設けると次の降雪との

關係は東面に於ける場合と殆んど異ならざるも、日中に於て直射光線を受けざる故に雪質は従つて變化なし、此處に注意す可き事柄は風の雪質に及す影響にして、若し北面が假令日光にての影響少きとは云へ風が強く打ちつける場合には雪は壓迫され硬化し、一種のクラストを形作る（*At Hold Inn - Alpine Training* 参照）此のクラスト狀に新雪の積雪を見ると非常な微風にて滑動することが出来る。（勿論スロープの傾斜角に依る）

以上の如く極く簡單に方位の關係を記したるも、尙此れを充分に明かにすることは幾年かの研究心に依り初めて納得さる可き問題なり。然しながら我々の如き單にスキー登山の初歩にて満足し、又然らざるを得ない者に取つては、此れ以上の困難なスキー登山技術を要求することは至難なことと思ふ。故に單に要求されるだけ、即ち北海道の山にて危険なき程度の研究と、それに應ずる技術を充分納得した場合に確かにスキー登山の初歩を消化したものと云ひ得る。近頃馬鹿に色々の雜誌並に單行本が出来たが、要するに彼等の意中を詳かにするとあるより以上の點からの出發換言すると初歩なしに第二段のステップを踏む様な行き方



ぢやないかと思ふ。それである意味で云へば物知りで、然も何も出来ない、貧弱なジャーナリズムと云ふ奴におちいりやすい。只我々がスキーにてステップを續ける各自の動作と、その範圍に於ける關係との連絡を普く考慮したならばその練習後には自然に意義ある地點に達し得るものである勿論我々は機會ある毎に多くの人の研究と、その讀書力を養成することは肝要なことであるが。

かゝる如き證據よりして些少雪庇の二三の關係を記述したに過ぎない。只各自の研究と他との研究とを對照し納得出来る様になつて欲しい。

此處には單に雪庇の初歩に止まる駄筆を示したのに過ぎないもので、他の多くは他日を待ちて記載する考へである。昨日には全く見られなかつた雪庇の崩壊が今日のスキー歩行中に見出されることがある。所謂スノーボールを呈し轉ぶ場合もあり、又雪庇の崩壊が數尺或は數十尺下方までに止まつて以下は何にも衝害を與へない時もある、或は細片に分解したる雪塊が無數に散在して歩行を困難ならしめることもある。斯の如き色々の形に於て崩壊はするものゝその依つて生じる所を確實に見解すると何等の疑問もなく

當然の結果と解釋することが出来る。

前述したる如く雪庇は一種の固定物と稱し得べきを以て其の自然的作用に依る變化も種々雜多なり。

今此の雪庇が崩壊する總括的形式を論じて見るに、第一に崩壊する部分は庇の所有部であること、次に崩壊したる雪は雪質に依りて(a)スノーボール、(b)細片、(c)塊狀の三様形に分る。

(a)スノーボールと云ふのは雪庇が落下し傾斜面に沿ふて降下する時に斜面の表層雪を抱き込み球形を呈し次第に大きくなつて轉下するものを云ふ。北海道に於ては三十度以上の東面部又は南部、或は東西部に小さきものを見ることが出る。此の方位のみにスノーボールを見ると云ふことは斜面の表層雪質の關係に依ることにして、所謂の *Windfall* に到達した位に生じるものにして午前中に多い。然しながら雪質が此れに適應したる場合と雖も雪庇量過大なるときは壓縮されたまゝ停止する。傾面が二十五度以内の時には勿論何をする必要もあるまい。

(b)細片を生ずるのは雪庇の降下部分が傾面との衝撃を受けた際に、其の斜面がやゝ硬化を呈していると反作用に依

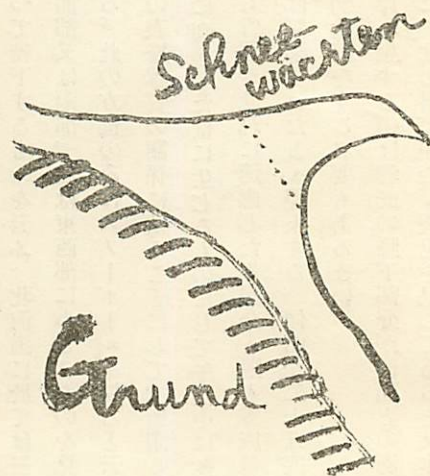


りて細片され、著しき傾斜をなす時には糸を垂らした如く  
數多の降下線を呈す、餘り急ならざるときは次の(c)の如き  
型態を生ずるか、只數尺轉下するに過ぎず。

(c)塊狀を呈するのは(b)の場合にも述べたるが如くなるも  
多くは雪崩と雪庇崩塊とが連絡した場合なり、即ち雪庇が  
落ちた爲めに雪崩を生じ傾面上に雪庇塊塊が散存する、と  
云ふと變だが、此の場合の雪崩は些少を意味し表層崩れの  
一種として割合に重い雪庇があとに取り残されるのであ  
る。又一方塊狀を生ずるのに(a)のスノーボールと類似した  
状態をなすが轉下せず斜面に停止することがある。此れは  
彼の樹木から雪塊が落ちたる時の感がある。

第一の崩壞部のことを詳細に説明すると、圖解したる如  
く點線の所から落下するが、此の點線の角度は雪庇の量の  
大小に依りて決せられる、又形の如何にても左右さるので  
ある。故に一論には決せられないが、一般には圖解した如  
く崩壞すると思へば差支へあるまい。それで我等がスキー  
又は單獨で雪庇の上方を歩く時にはその疑念を抱き注意せ  
ざる可らず。

次に雪庇をスキーにて切貫する様子を研究して見ると、  
此れは何時も時間を雪庇に費し、そうせざるを得ないもの



ゝ如く考へられるが、その雪庇の形狀及び構成原因を深く  
考へるとそうまで手数を懸けずに終ることが多い様だ、今  
まで多く無理にその場所を切り貫けたいとの一念でやつた  
場合多く、従つて無理な時間を費し、終了に於ては無用の時  
間を費すやうなものだつた。僕等が一つの山を登行する場  
合に一つ位の雪庇に出會するを例とする、その時は只ジツ  
クザツクをして頂上に居かんとするのみであつて、雪庇に  
對する批評力は非常に浅い。目前に出會すると躊躇した足  
どりで無理に雪庇を足でつく、こうすると變な所で徒勞を

なすことになる。故に充分に常風と尾根との連關關係を心得ることは登山中の一つの義務の様に考へなければならぬ

若し不意に雪庇に出會した時はどうすればよいか。其れは常に尾根と氣流關係とを熟視することである。其の日に出來た雪庇か、或は數日前に出來た雪庇かを第二に注意する。此れは確實に決定すると云ひ難いものなるが、常風と當日の風向とを意識してゐれば、又雪質を判定し得る力があると案外その判定もやすく切り貫きもたやすく出来る。これは前述した色んなことを總括して考へてもらいたい。只此處には雪庇に不意に出會した時にどう云ふ方法を取るかを少い經驗だが一寸記す。

スキーの重心はバツケンより上方にあるものであつて、我々がステップする毎にベンド面は第一に雪面にタッチすかゝる場合に雪庇の横から水平方向にスキーで切り貫くとす、其の時はどうしてもスキーの先の雪庇は中に入り込み次の動作が非常に苦痛さる。若し雪庇が硬化ものなるときは一度貫き込んだスキーはベンドの關係上後退するも努力がある、故にスキーでかゝる場所に到達したるときはスキーを水平以下の角度に保ち、雪庇の上方より打ち込み、一つのスキーの巾位の傷をつける。此處でよく地盤を踏み固

め、次の行動を取る。此れが全うされると雪庇と傾面とが連續されたものとなる、此れから先は成る可く水平位置にスキーを保ち雪庇を階段狀に打ちつける。時にはストックの先、或はストックの後端で雪庇間に孔を穿ちスキーの通動をたやすくし、切り貫きに成功す。雪庇が常識で考へる以上過大且つ硬化の場合は全然手をつけず迂回する以外に道があるまい。勿論ピツケルの使用を許す範圍に於ては斯様なこともあるまいが、我々の様な一般スキー登山の若輩ではそう云ふ意識のもとで山を歩いてゐる。

雪庇が柔かい時には水平方面にスキーを打込むとたやすく通過可能ならしめるが、往々に注意を欠くと雪庇と一絡に轉下することがある。常に自分の重心の位置と傾斜の關係とを念頭に置き然る後に踏行するが最善の方法で、注意力養成は自らかゝる雪庇にも比較的容易に解決を見出すのである。

雪庇に關する事柄は多分に内容を含み一概に論じ盡すことは至難のことにして、其の上此の淺き經驗としては當然論究することは出来ない。只將來諸兄の御研究を待ち相共に盡力することが出来れば何より感謝の意を表するわけである。



## デスタンスレースの練習法に就て (一)

高 橋 昂

デスタンスレースと云ふことは、既に御承知の如く距離の競走のことではありますが、現在多く採用されて居りますのは、長距離競走と、大長距離との二つであります。

私は唯今からのこの長距離競走と大長距離競走に就いて述べたいと思ひます。

長距離競走は、通常短距離競走と云ふ様に稱へられて居りますが、實際に於ては十五基米から二〇キロ米にも互る長い間の競走でありますから短距離と云ふ言葉よりは、むしろ長距離と云ふ方が適當であり、之に對して大長距離競走と云ふ方は、三〇基米から六〇基米に互つて山谷を走る競走であります。

比較的短かい方でも十五基米以上もありまして、そのコースの中には山や谷や、野と云ふ様な各種多様の地形が含

まれて居ります。

冬の厳しい寒さの最中に、重いスキーや複杖を身につけて、すさまじい雪煙りをけたてて、疾走して行くスキー選手は、夏期に於て常によく見られるマラソン競走に比較し優るとも劣らない体力と、スキーだけにしかない雪質、気温、地形等に對する學理の實際を必要とされて居ります。

この學理の實際と云ふことは、スキー技以外の競技に於ては、とうてい見ることの出来ない物理的變化と、化學的變化即ちケミカルを必要とする居るのであります。

その中でもこの化學を必要とする技術は、恐らくスキーだけにしかない獨特のものであると思ひます。

例へば雪と木材の關係、スキーの強弱とか弾力、諸運動と重心との關係、WAX即ち蠟と雪との摩擦との關係と云

ふ様な物理的變化と、蠟の塗り方とか、蠟の作り方とか云ふのが化學的實際であります。

然してスキー技が本邦に入つてからやうやく二十年、その二昔の間に培はれたデスタンスレースに對する技術の進歩は實に目覺ましく、本場の北歐に行つても決してはづかしからぬものであり、よくも獨學によつてかくまでなし遂げたものであると感心した位であります。

又器具の方面に於ても、歐洲品に劣らないばかりでなく特にステックにあつては日本の竹が最も優秀なのであります。

かくの如く日本のスキー技は國際的にも重きをなすに至つて居るのであります。

かくの如くスキー術が進歩し、一方距離も長くなつて來ますと、四五年前までは、クリスチャニアとかテレマークとか云ふ單に技術方面の巧みな選手が優勝したと云ふ様なこともまゝあつたのであります。もう今日では單に技術のみでは優勝も難かしくなり、優れた體力の所有者を必要とされて來ました。

優れた體力の所有者と云ひましても、普通の言葉で云ふ

馬力者と云ふものではなくして、技術を伴ふた體力の所有者でなければ眞のスキー選手となることは出來ないのであります。

### 練習の時期

スキーシーズン是一年の中でもある限られた、積雪時だけであります。デスタンス選手としての眞の練習生活は一年を通じてあるばかりでなく、四年とか五年とか云ふ絶ゆることない努力を必要とされてゐます。

このことに就いて昨年來朝した、ヘルセット中尉は次の様なことを或る席上で申されて居りました。

デスタンスレースの選手の生活は常に規律正しく眞面目でなければならぬ。

例へば、ジャンプの選手の中には、酒や煙草を飲む選手がまゝあり勝ちであり、そうした選手が優勝する機會が可成りにあるのであります。デスタンスレースにあつては決してそうした間違ひはない計りでなく、選手としての正しい生活はやがて活社會に出でゝからも守られ、信望が厚いと申して居りましたが眞に味のある言葉であると思ひま



す。

實際長距離競走に出場すると云ふことは、仲々に難かしいことではありますが、中でも五〇軒と云ふ様な大長距離競走に出場すると云ふことは一層難かしいことであります。

それでこの競技に出場するには四年とか五年練習を必要とするとかへ稱せられてゐる位なのであります。それでありますから大長距離は勿論のこと、長距離に出場せんとする諸君には冬期は申すまでもなく、年中を通じて心身の鍛練と云ふことに注意せなければならぬのであります。之を準備運動と、正式運動の二様式に分けてお話を進めてまいります。

### 準備運動

と云ふのは全身的の運動であれば、何でもよいのであります。中でも最もスキー運動に適すると思はれるものから順次に申上げますと、漕艇、クロスカントリー・ランニング、強歩、水泳、器械體操、柔剣道、陸上競技となりま

す。  
然して最も推稱されてゐる漕艇に關して、北海道は比較

的恵まれてゐないことは残念なことでありますが、それに代るべき運動として私は、器械體操と、強歩と、クロスカントリーランニングを適當に組合せ行ひ得ればよいと信ずるのであります。私は九月と十月をよく隅田の河で體力を養ひましたが、ボートは確かにスキー家に最適してゐます。やかましい腕の運動、腹部の運動等々は、スキーの平地滑走や其の他に非常に、よく似通ふて居ますが、五人とか七人とかの多人數を揃へると云ふことは、容易なことではないのであります。或るチームの選手が合宿してゐるとか、其の他特別の事情のない限り、この多數の相手を集める間に他の方法によれば練習を終つて居るによいのであります。

而してスキーの豫備運動としての漕艇は、脚力を養ふには餘りにも貧弱であります。そのためにはどうしても強歩とか、ランニングを必要とされてゐます。

要するに以上の各種の運動の中で最も己れに適するものを巧に利用して、體力を保持して行くと云ふことが大切であります。

然しながら、夏期に於ての運動選手としての身體をそのまゝ持續して冬期運動選手としての生活に入つてしまふと

云ふことは、餘り良好な成績をもたらさない様であります。歐洲に於てもスキー選手の大部分は、夏期に於て、身體にある意味に於ての休養を與へると云ふことが、一般になつてゐる様であります。

秋季になつてからは次第に運動の量と強さとを増加して行つて、體力の繼續力を増して行く様にせなければなりません。私の経験でも、十月から段々と増加して行つて二〇分―三〇分位の程度のランニングを続けるのがよいかと思ひます。

そうして十一月の聲を聞くと直ぐ正式に競技に對しての準備を初めます。

## 正 式 運 動

これからの行動は規則正しい日常生活が續けられなければいけません。私は仕事の都合から午後によくの豫裕を持たなかつた關係と、冷たい空氣になれると云ふ意味で、毎朝五時に起きて感胃に罹らない様に充分厚着して素早く元氣よく戸外に飛出し、二〇分三〇分を精一パイに走る。又何かの都合でそれが出来ない様なときには、一哩を五分以

内で走る様に初めつから全速力で走ります。

そうしていつどんなに急劇に走り出しても腹いたみなんかがない様に準備を重ねてまいります。

かくして體力の養成よりも主として、寒い氣候に馴れると云ふことと、肺と心臓により多くの努力をしました。

汗を拭ふて衣服を着換へた後の爽やかな氣分、運動によつて得られた良き血のめぐりは、確かに終日羽織一枚を約させます、然しながら雨あがりの朝の戸外運動は、吹雪にも増しての困難があり、練習を中止させようと思ひますが、もう今度は、一日でも雪の降るまでは斷じて休んではいけません。休む様なことがあつては切角の今迄の練習も無益に終つてしまふのであります。

有名なる北歐の大選手、ハウグ氏も彼の練習日記の中にも、正式練習を初めたならばスキーをつけるまで續行せなければ効なしと記入されてゐる。

次に此の期間にあつて特に注意すべきことは、前に述べた、如何なる急劇なピッチに對しても腹痛を起さない様に習慣づけることであつて、一朝この悪習に染まれば、スキーを足にしても絶えず悩まされ勝となると云ふ極めて苦い



經驗を知つて居るのであります。

それには順次に運動内容を豊かにして悪習を付けない様にするのが賢明な方法でありますが、不圖したことから腹痛を起した場合には、唯、抵抗療法の一途あるのみであります。雪が降ると間もなく藪や、其の他の個所に危険のない様に注意深く、デスタンスコースを取つて一般に先づ五基米——最高十基米を走ります。

それから後はトレーニングの距離を延ばさずに徐々に速度を増して行きます。これはスキー王ハウグ選手の採用された方法であるが、最も要を得て居ると思ひます。

そうしてこの練習が十二月の中旬まで繼續せられて、こゝに於て各自の個性と体力とに最もよく適合した走法と繼續力とが作られます。

この期に於て私は前述のハウグ氏の注意と、併せ採用してよい成績を得たと思ふことは一日中、スキーを足につけばなしにして、早くスキーと身体が一致する様にスキー履きこなすことであります。

このグラウンドに於ての遊びが、長距離の練習として豫想以上のスキー技の進歩に益することを實驗してゐます。

特にそれが疲勞して來てから後に於てのスキー術は、勞力とか無理とかがなくなつて無意識の間に極めて自然にされるスラ／＼としたスキー術が生れてまいります。

とかく單調になり易いこの練習も良き友を得ることによつて、愉快なトレーニングをなし得、進歩のテンポの早いことは全く驚くばかりであります。

それと似た様な例として次の様な實例がありました。

或る地方の有力なスキー選手の指導をしたときに、どうしてもその人々の悪い走り方が直らない。ことにその悪い點はスキー術の基本とも云ふべき平地滑走であつただけに色々考へてゐる中に、思ひあたつたのが前述の應用であります。即最初教へ様とする選手を、眞からくた／＼に疲れる迄走らせて、相當つかれたと思ふ時分を見計らつて、その選手に適した走法を指示してやると疲勞によつて選手の自我の力が失せてゐる時ですから、示され最も適した走法がす／＼と素直に受け入れられる。この瞬間にかみ得たコツを「遅くとも確實に」と云ふ主義のもとに練習を進めて、己れのものとしてしまふのでありますが、これは指導者の側から見た最もよい練習法であります。

何運動でもそうでありますが、特に時間と距離の關係が不確實なスキーにあつては、單獨でトレーニングを行ふと云ふことは極めて不利益なことであります。

其の一つの例としまして或る地方の選手が雪が良過ぎるため速くなり過ぎて困ると云ふてゐるに反して、或る地方の選手は迂らなくて困ると云ふ全く相反した二つの状態がありました。其の二地方の選手が或る日に一緒に迂つてゐるのを見てゐますと迂らないと云ふ選手のスキーが、迂るといふ選手のスキーより遙かに速いのであります。

迂る迂らないと云ふことは、結局或程度までは各人の主観によることであつて、今日の様にWAXの使用法が複雑になつて來ますと、一層速度の比較となる對照物が絶えず必要となるのであります。





## 第二回御來道記念大會の距離競技に關して

高 橋 昂

秩父宮、高松宮兩殿下の御來道を記念する第二回御來道

記念スキー大會は二月二十一日を第一日とし二十二日及三月一日の三日間に互つて札幌神社外苑スキー場を中心として左記プログラムの如く華々しく開催された。

第一日 正 午 開會式

午後 一時 少年組、青年組、壯年組 10km 長距離競走開始

第二日 午前 九時 本部前集合

同 九時卅分 スキー行進

同 十時 札幌神社參拜

同 十一時 飛躍競技開始(幼年組、少年組、青年組、壯年組)

同 幼年組長距離競走開始

第三日 午前 十時 10km 耐久競走開始

午後 四時 賞品授與式(本部樓上)

此の競技會は加盟團體三十八、會員實數二千六百名の團員を有する札幌スキー聯盟の年中行事にして競技の内容及組織に於て本邦スキー界の模範にして、道民三百万は稱するに「宮様デー」と名付け、スキーの林立する當日の札幌市は實に偉觀である。

此の競技會は毎年二月二十二日を中心として、道民の健全なる精神的訓練及身體的鍛鍊を計るを以て目的とし左記の如き競技組織よりなる。

幼年組(滿十一才—十四才迄) 飛躍競技 {A組十一才及十二才  
B組十三才及十四才  
少年組(滿十五才—十七才迄) 飛躍競技、長距離競走  
青年組(滿十八才以上) 飛躍競技、耐久、長距離競走、複合競



大聖寺上より觀たる西行内岳

栃内吉彦



技

壯年組(満三十才以上)長距離競走、飛躍競技

### 18km長距離競走

天候、雪質ともに最良、札幌の冬としては珍らしい快晴に恵まれて選手も観衆も和かな気分には飽和され、競技は正午後一時少年組中村、長田兩君を先頭として三十秒毎に二名づつ出發し、少年組四十名、青年組百十六名、壯年組十三名の出發を終つたのは一時三十分三十秒であつた。

### 走 路

記念シャランツエを出發して約1km、小別峠の入口まで緩い起伏を三つ續けて峠の急傾に呼吸が急に早まる頃、意地悪くも強い陽光を受けた南面の雪はとけ出して選手は早くもこのところで苦しめられてゐた。小別峠の頂きから西方へ向ひ一直線に1kmの痛快な滑降は登りの苦痛を解消して尙餘りあるところ、緩い登高と急斜面で1km、屈曲は強い右廻りと左廻り一つづつを徑て發寒川の支流の橋へ、橋を越えて支流に添ふて湖の1kmの平地は、平地とは云ふものの途中數ヶ所に油断を許さぬ所あり、續く1kmの

走路は絶えず登つては少し降り、登つては降りしてゐて、その中の約1kmは北歐人のシーズン走路と稱する地平に屬するものであつて、氣持のよいこの1kmの走路は知らずの間に、標高450mと云ふ本走路の最高地點である⑤關門へと導いてしまふ。この第五關門からは右山の左廻り、弧狀急坂滑降に續く1kmの連續した谷流の滑降は本走路の生命であつたと云ふべきであらう。第六關門から三つの谷を越えて幌見峠に出で峠の頂より一般走路を1km降つて神社山西方無名山山麓の潤葉樹林帯を通過して、大倉山南方高地の三つの起伏を越えて決勝點へと丘から物凄い直滑降にて躍り込む。この最後の物凄い滑降は選手をも役員をも觀衆をも總てをば歡喜せしめて多くの競技會に見られる重苦しい気分も一掃してしまつてゐた。

出發前の氣温の高昇に一時雪質を悪くしたけれども、直接その影響を受けたのは僅かに前述の如くに小別峠、南面入口の一小部分だけであつて、峠を越してから第五關門の1km附近までは北面斜面のため雪質最も良好、その後の歸路は時の経過とともに氣温は劇しく出したに加ふるにその殆んど總てが東或は北面であつたために、雪質は益々良

化したために記録は大變優秀なものとなつた。

18km 少年組成績

姓 名	出發順	所要時間
1 關 戸 力	(20)	1時 35分 50秒
2 大 浦 忠	(39)	1 37 4
3 今 野 正	(23)	1 45 10
4 相 見 健	(5)	1 45 49
5 錦 戸 善	(19)	1 46 22
6 中 村 健	(1)	1 47 3
7 松 本 二	(21)	1 47 13
8 杉 本 辰	(12)	1 47 29
9 伊 藤 雅	(36)	1 49 56
10 伊 上 島	(26)	1 50 17
11 伊 藤 基	(37)	1 50 36
12 志 村 誠	(25)	1 52 30
13 小 川 愛	(16)	1 52 44
14 香 曾 我 節	(24)	1 53 54
15 三 瓶 重	(15)	1 54 38
16 佐 藤 正	(14)	1 55 51
17 山 口 孝	(6)	2 8 40
18 邊 見 文	(3)	2 11 28
19 横 堀 又	(33)	2 15 13
20 樋 波 藤	(30)	2 20 37

18km 青年組成績

姓 名	出發順	所要時間
1 宮 村 六	(127)	1時 36分 18秒
2 北 野 正	(134)	1 37 37
3 秋 野 武	(68)	1 39 36
4 本 野 四	(84)	1 40 22
5 黒 間 田 敦	(136)	1 42 47
6 棚 橋 卓	(87)	1 43 2
7 毛 内 章	(138)	1 43 5
8 小 池 高	(79)	1 43 20
9 稻 葉 忠	(128)	1 44 30
10 石 塚 正	(49)	1 44 58
11 村 佐 三	(142)	1 45 11
12 野 野 正	(139)	1 45 28
13 山 上 信	(114)	1 46 17
14 長 田 島	(154)	1 46 41
15 半 野 光	(55)	1 47 4
16 野 澤 正	(110)	1 47 51
17 小 寺 將	(63)	1 47 54
18 藤 澤 佐	(96)	1 48 20
19 鈴 木 武	(59)	1 50 3
20 澤 本 長	(54)	1 50 22
21 竹 内 市	(93)	1 51 19
22 後 藤 民 彌	(120)	1 52 7



23	大谷	徳義	三民	(67)	1	54	1
24	清加	久藤	義朝	(99)	1	54	4
25	西藤	邊孝	武彦	(83)	1	54	23
26	渡邊	安齋	光治	(145)	1	54	29
27	安齋	藤幸	治圭	(140)	1	54	38
28	齋藤	皆月	圭藏	(95)	1	55	53
29	齋藤	皆月	圭藏	(60)	1	56	7
30	皆月	金巴	藏一	(88)	1	57	11
31	中鹽	恒澤	藏一	(105)	1	57	11
32	中鹽	澤巴	藏一	(45)	1	57	53
33	中鹽	澤巴	藏一	(137)	1	57	58
34	中鹽	澤巴	藏一	(112)	1	59	3
35	上川	岸輝	雄正	(46)	1	59	47
36	上川	岸輝	雄正	(89)	2	0	10
37	川口	森徳	進一	(126)	2	1	33
38	久保	富士	一夫	(56)	2	1	55
39	久保	富士	一夫	(98)	2	2	3
40	井上	保一	雄	(52)	2	2	56
41	坂本	保一	雄	(43)	2	4	21
42	小林	正敬	敬	(75)	2	6	1
43	小安	孫子	六郎	(61)	2	6	4
44	澤田	敏秋	秋	(140)	2	6	45
45	三上	勝雄	雄	(44)	2	7	21
46	伊藤	英市	市	(62)	2	8	18

18km 壯年組成績

姓 名	出發順	所要時間 1時 57分 32秒
荒畑 敏郎	(94)	2 9 45
鈴木 四郎	(71)	2 10 4
松本 六郎	(106)	2 10 47
三浦 猛夫	(47)	2 11 48
平野 正治	(122)	2 12 36
鹽澤 好	(51)	2 18 37
牧野 義行	(147)	2 21 32
田上 義行	(91)	2 22 29
芳賀 恒太郎	(167)	2 3 26
高橋 武次郎	(157)	2 3 26
山田 廣	(168)	2 14 40
高野 重一	(166)	2 19 36
眞山 博	(159)	2 20 43
針生 巖	(156)	2 22 13
長田 忠一	(160)	2 27 17
石田 悦郎	(163)	2 45 33

40km 耐久競走

此の競技會は「宮様デー」の中でも特記すべき記録を残した日と云ふべきであらう。それはとりもなほさず走路が總ての體から舊敷を破つて、登山家のスキーも競技者のス

キーも同一であると云ふことを如實に示した眞のスキー走路であつた。その走路圖が前月の夕刊紙上で發表せられるや如何に話題の渦を巻き起したかは、賞めることをよくしなない北海タイムス紙の「熊の目」に次の様な記事が讀まれたことである。

「けふ催される札幌スキー聯盟の宮様スキー大會三日目の四十キロデスタンスコースは本道スキー界では破天荒のとり方である。即ちバラダイスヒユツテを經由して手稻山を横斷する壯大なコースでその結果は刮目に値するものである。このコースの成績によつて將來大競技會が札幌で催される際には更に手稻山から奥手稻山の家をかけヘルヴェチアを經由する大規模のコースも或は企てられやう。この意味に於ても本日のコースはまことに貴い試練である。フレイフレー選手」

これではいささか選手の方が激勵されてゐるかたちである。いづれにしても行き詰りかけてゐた北海道の耐久競走に新機軸をもたらした。この思ひ切つた走路の關係からしめていつもの競技會に於ても見受けられる様な、途中までとか云ふ様なよた氣分の者や、いかがわしい選手は影をひ

そめて全く見受けられなかつたと云ふことも氣持のよい一つであつた。

競技はプログラムに豫め記入の時刻通り、正十時札工大原君を先頭として開始され、最終走者の箕輪君85番の出發を終つたのは十時廿一分であつた。

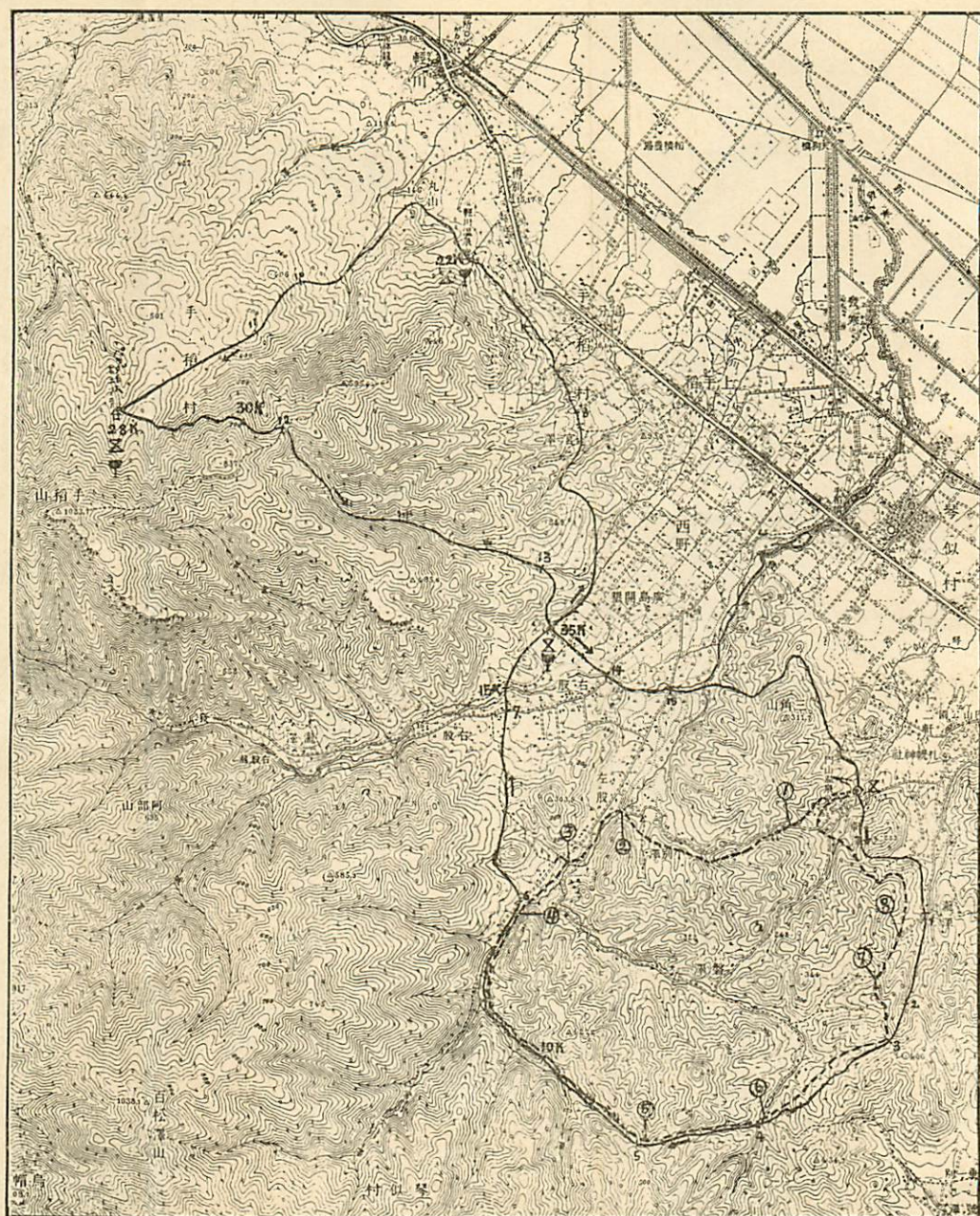
朝の中は良天氣と喜び合ふてゐたのもいつしか小雪と化して、多數の選手の右股通過(出發點から約1500m)を報ずる頃から少しく風さえ吹き出して來たので、1500m 輕川溫泉から1800m バラダイスヒユツテまでの登高路に於ての選手や役員の苦闘は、一方ならぬものがあつたであらうと推測するに難くない。而してこの走路を作るときにこの山奥に於ての吹雪の襲來を豫測して作つてゐたので、比較的輕くてすんだと云ふことも當事者としての尊い經驗の一つであつた。バラダイスヒユツテから右股までの間少々位の吹雪には一寸も手配を要せない安全地區であつて、わけても「中の川」の滑降路は本大會の選手及走路員を隨喜せしめた。トニ ノンストップと云ふめずらしい快走路であつた。

特に當日の吹雪と氣溫の低下とは益々雪質を良きに導いたために選手は思ひ切つた快速を出して、疲勞も右股 3000m



第二回御來道紀念大會走路圖

40 KM 實線 1—15 關門    ✕ 電話    🍵 給養所  
 18 KM 破線 ①—⑧ 關門    ◎ 出發及決勝點





に達する頃合には醫せられて、右股給養所をして殆んど形式だけとしてしまつたと云ふことも特記すべき事柄であつた。かくの如き後半のすばらしい成績に比して芳しからぬ前半右股 Tscham までの原因は何に起因するかと云ふと、降雪直後に起つた一時的暖氣であると云ふべきであらう。此の區間の走路は別表の示す様な時を必要としない様に作られてゐたのである。わけでも第五關門附近からの Gamin と云ふ區間はすばらしい記録を豫想して居つたのに、選手出發後の急劇な氣温の變化は各選手とも「道を持つて行つた」と云ふ言葉を使ふてもよい位スキーに雪をつけて右股給養所 (16km) に入つて來たので、見兼ねた應援の人々が雪をとつてやつて居たが、その悪い状態で輕川へと行き去つたものの、此の状態で推し行くならば選手の過半數は途中でつぶれてしまつて、無事で歸り來る姿を Gamin の右股に於ては再び見ることが六ヶ敷いのではないかと疑念を起した

#### 40km 耐久競走成績一覽表

氏名	出發番號	出發時	16軒右股	22軒光風館	35軒右股	決勝線	出發所要時間	順位					
鹽澤巳好	4	10時 1分30秒	29	11時 38分15秒	29	12時 10分	29	1時 38分50秒	29	2時 4分30秒	29	3時 50分30秒	2

と云ふ、前半の惡状態に比して、後半はこの豫想を全く裏切つて、どの選手も元氣で給養所を振向かず三角山へと向つて行つたのは意外であつたと云ふことを右股主任の錦戸君が語つてゐた。右股から三角山までの小川の林間滑走は札幌附近のスキーヤーが等しく嫌ふ、西野の平野を最も面白く活かしたところである。いづれにしても札幌の誰れもが知らなかつたバラダイス——右股——三角山のこの愉快な滑走路を開發すべく計畫してから三月目に美事成功したときには、相手の Knut Olson 君と右股の一服休みに酒杯をかたむけて喜び祝ひ合ふた程であつた。

その後此の走路は一般スキーヤーの通路となつてしまつて、今では輕川驛經由で札幌へ歸る人が殆んどなくなつたと云ふことである。バラダイス——圓山間を四十分たらずで歸れる時間は、往時水酒盛までして手稻登山をした時から考へるならば轉た夢である。



清久義民	5	10	2	23	11	41	35	23	12	19	48	1	51	48	2	19	15	48	3	55	45	3
志村誠一	6	10	2	4	11	42	15	4	12	22	85	1	55	85	2	21	7	85	3	39	7	1
川岸宗政	7	10	3	6	11	42	30	12	12	22	49	1	56	49	2	25	46	49	4	1	46	5
小野寺將	12	10	5	12	11	44	45	49	12	22	12	2	0	12	2	29	58	12	4	24	28	14
安達重光	15	10	7	7	11	46		7	12	24	59	2	3	68	2	30	4	68	4	1	34	4
窪田一郎	18	10	8	49	11	48	5	48	12	25	38	2	3	59	2	34	25	59	4	5	25	7
榎本保雄	22	10	10	37	11	50	20	37	12	28	7	2	4	60	2	36	23	60	4	6	53	8
中村謙一郎	23	10	11	48	11	51	20	38	12	29	68	2	5	38	2	37	25	38	4	18	55	12
武田芳正	27	10	13	38	11	52	25	6	12	33	60	2	8	50	2	37	3	50	4	12	33	10
宮村六郎	29	10	14	50	11	56	10	85	12	34	50	2	8	7	2	37	36	7	4	34	36	19
高橋武次郎	32	10	15	15	11	57		50	12	34	72	2	8	72	2	38	58	72	4	3	28	6
出村總吉	37	10	18	44	11	58	30	60	12	35	37	2	12	23	2	40	19	23	4	29	19	17
山田實	38	10	18	32	11	59	5	59	12	36	53	2	12	53	2	40	34	53	4	14	34	11
皆月桂	42	10	20	18	11	59	5	18	12	38	23	2	13	37	2	42	44	37	4	24	44	16
富田省三	44	10	21	22	12	1		44	12	38	62	2	19	81	2	50	2	81	4	10	2	9
駒井三郎	48	10	23	60	12	1	5	68	12	39	81	2	20	62	2	50	2	62	4	19	32	13
安立正雄	49	10	24	27	12	1	25	32	12	39	18	2	29	18	3	1	23	18	4	52	53	23
長田光男	50	10	24	61	12	1	50	15	12	41	4	2	29	61	3	1	44	61	4	31	44	18
村木慶三	53	10	26	59	12	2	5	62	12	41	32	2	30	44	3	3	40	44	4	42	10	21
藤澤佐一	58	10	28	85	12	3	50	53	12	42	44	2	30	80	3	4	9	80	4	24	39	15
鹽田鐵雄	59	10	29	68	12	4		72	12	43	80	2	33	4	3	4	47	4	5	3	17	27
宮下利三	60	10	29	58	12	5	30	61	12	44	61	2	33	58	3	10	43	58	4	42	13	22
柳橋卓郎	61	10	30	62	12	5	30	27	12	45	58	2	40	32	3	11	35	32	4	56	5	24
上島信	62	10	30	53	12	5	45	22	12	45	77	2	44	77	3	16	15	77	4	38	15	20
星光平	68	10	33	5	12	8		58	12	45	22	2	45	42	3	20	34	42	5		4	25
結澤熊一	72	10	35	72	12	9		80	12	50	42	2	45	42	3	24	47	27	5	11	47	28

# 全日本選手権大會に臨みて (三)

時 日 二月十七日午後六時

場 所 札幌商工會議所會議室

出席者

箕輪正治、秋野武夫、本間四郎、小野寺將、村井延雄、關口勇、長田光男、葛西儀四郎、高橋次郎(小樽高商教授)、南留三郎(札幌商業教諭)、錦戸善三郎(札幌第一中教諭)、高野重一(北海道廳員)、宮下利三(道廳)

大野教授、柄内教授、廣田戸七郎、高橋昂、長野寛

南 走路監察員の訓練が足りない。もう少し走路監察員の訓練が必要だ。

高橋昂 講習會の問題といふやうなものもあゝいふコースだつたら注意して考へなければならぬと思ふ。

注意を加へるなら、お前こゝを直せといふ風に。

この間のタイムスに、之は走路委員が、態々最初の一番目を通り一回は一寸、初めは横になり、二番目は標識付三番四番その後に僕が一番悪いやつが付廻る様にしてつけた

南 それは高橋さんのやうに全コースを廻るやうな熱心家であればよいが、慥ふいふコースを廻るに慥ふいふ標識にせよといふやうなことも教へる必要がある。

宮 下 それは全日本スキー聯盟の本部に願ひする問題ですよ。それで南さんはいはれるやうに走路委員を結局訓練しなければ駄目です。

南 スキーの杖のやうなもの——こういつたものは大會を開くにあたつて之に對する注意は日本に進歩が未だ不足だ。

それで大會に不服が出る。しかもそれが可なり甚しい。之は實際家が色々研究されて發表されたらどうかと思ふ。

高橋さんは向ふのオリムピックを御覽になつたでせうがその模様、標識はどんなになつて居りますか何か發表されたら参考になると思ひます。



八末孝夫	73	10 36	42	12 10	81	12 51	27	2 47	22	3 24	55	22	5 14	25	29	33		
小林正敬	77	10 38	80	12 14	42	12 57	73	3 6	15	73	3 38	34	73	5 2	34	26		
田上義行	78	10 38	30	77	12 14	20	77	12 58	84	3 16	20	84	3 55	44	84	5 14	14	30
齊藤孝治	80	10 39	30	81	12 16	30	73	1	1	3								
黒田 敦	81	10 40		73	12 18	40	84	1	3									
鹽澤巴一	84	10 41	30	84	12 21		78	1	11									
箕輪正治	85	10 42		78	12 30													

(備 考)

上記表中各ポイント通過順位は番號のみ記載しましたから氏名は出賽番號と照合して見て頂きたい。

高橋昂 それは本に書くのは六ヶ敷しいので現場でなくちや駄目です。併し標識のつけ方が悪ければ僕はオミットしません。

兎に角標識の所を歩かなければ探らない。

途中で眞直に旗の直ぐ傍を通らなければいけないといふがさういふことはない。

宮 下 併し本へ歸るよりよい。

廣 田 實際大會の組織といふことは、あいつはジャムプの時はさう問題が起らないが、デイスタンスは何處へ行つても問題で監察員といふものは難しい。日本にも諸威のやうに走路つけが商賣になるやうな時代になれば走路の心配はなくなる。

高橋昂 併し僕の考へでは諸威だつてヘンリツクセンといふ豪い奴が、何の某組、ポイントマン、補助員を伴れて行つて自分の受持走路を踏むのは陸軍から何十名、軍隊のやうな時間の觀念のない日本の走路委員は何時まで經つても同じことを繰り返してゐると思ふ。その點からいふと比較的大鰐はよく出来てゐる、青森縣スキー聯盟が今まで私の參つた處では一番よいと思ふ。

廣 田 兎に角青森は全國で一番です。

高橋昂 人もよいから、そのまゝ慇ふいつたことはこふいふ風にするといへば、その通りやる。

栃 内 それは東北人の特徴だが、よいね。

高 野 大鰐が何故甘く行くか。

廣 田 もう一つは札幌のやうに會社とか役所銀行などに勤める人が少ない、だから自分の店を打棄つてもやれるさういふ點が他の及ばない處だ。そして熱心だと來てゐるし、東北が一番遅れてゐるといふ頭腦があつたものだから猛烈にやつた。

宮 下 けれども今兵隊の話が出たが日本の兵隊さんにはコースを踏んで貰ひたくないな。

(笑聲起る)

高橋昂 五六年經つてからなら皆んな穿ける？僕達ならほんとうに十分か二十分で行けるところを一時間もかかつてゐるがお氣の毒だと思ふ。今迄さういふ考を持つたことはないが、之は選手としてとなく役員としてコースの走路委員の一人として若し立つた場合を考へますとさう思ふ。選手連は今軍隊に酷な批評を加へるが非常に氣の毒と思ふ



スキーが出来てゐないからさういふ人達には非常に氣の毒と思ふ。やつてゐる人は矢張熱心によつてゐるんだ。

高橋次郎 併し僕は慙ふ思ふ。現在の選手達で競技會の援助を構はない人が非常にあると思ふ。

高野 それは援助させるやうにすればよい。

宮下 走路監察の辛いといふことが解つてゐる者よりも解らない人が熱心だ。

錦戸 樺太は寒いから走路監察員は寒いので薪を焚いて長い時間立つて居たのは可愛想だつたね。

高橋次郎 併し乍ら責任觀念からすると如何に辛くとも――僕等が監察員になつたら自分が選手になつて走る積りで走路をつけたり、監察員は自分が走るつもりで走路を完全にしなければならぬと思ふ。

高橋 けれども人間の問題になると却々訓練がかゝります。

地形を不自然に使はないやうにすることですね。

コースが自然に出来て居れば監察員は少なくとも思ふ

南 樺太では現在の選手中には地圖がよく讀めない

(賛成)

人もあつた。又コースをつくる人にも地圖が讀めない人があつた。

高橋昂 あのコースで皆んな轉んだところは眞直ぐに行くべき處をわざ／＼曲つて行かしてあつたからでせう。

葛西 あれは不自然です。

高橋昂 そんな處が大部分であつた。

錦戸 地方から來た選手は皆參つて居た。

高橋昂 デイスタンスコースで最後の四キロ位が六度から七度の傾斜でステックだけで押して入つて來る様な地形であり乍ら距離を延ばすために不自然な三角點までの登行を強いてゐた。

能く世間では五十キロのレースは正確に五十キロでなければならぬと考へてゐるが時によつて。それは四十八キロの時もあり或は五十二キロ位になることもあります。その點に注意されて採用されたいと思ふ。

南 殊に木の伐り倒してある所など。何百圓といふ金を使つたらしい。

栃内 樺太は雪が少ないので失業救済にやつたのでせう。

宮下 併しよくやつたと思ふ—コースといふものをよく作つたと思ふ。

錦戸 山地から裏山に、木が澤山横に折れて居つて山の中はスキーを穿いて歩けなかつた。

廣田 それではデイスタンスに關係した問題で、何かありませんか。

南 さうすると五十キロのコースでは上りに強い選手が勝つたか、或は下りに強い選手が勝つたかといふさういふ批評は下されませんが、つまりどつちに強い選手が勝つたか、さういふやうなコースでなかつたか。

高橋昂 二等を取つた田澤の頭脳はよいと思ふ—あの人は樺太産の選手ですが。樺太に合ふワックスをよく研究して。皆さんも御存知と思ひますがブラットリーワックスは上りがきつくて下りが、劇しいところに適し、又後半になるに従つてスピードを増すものであるが、それを使つたといふことは田澤さんはえらいです。だゞテクニクが非常に亂暴でした。

某 岩崎選手は迂らなかつた。御存知の通り樺太の雪はワックスのない方が迂る様だ。

高野 それぢやなんですか今度の大會で北海道の選手はデイスタンスが不成績のやうでしたがどうして選手達が樺太にしてやられたか。

高橋昂 五十キロの選手ならば負けたと思ふ。

宮下 あすこに行つて前の疲れはなかつたか。

某 シャンツエの裏の長い降りりで可成り弱された。足の筋肉の使ひ所が違ふと思ふ。

葛西 降りを續けてやると疲れる。

宮下 結局樺太信越の選手は強くて北海道の選手が弱かつたといふやうな何かさういふ原因があらうか。

高橋昂 コースが全然違ふといふのとあゝいふコースに慣れて居らなかつたといふ點と雪が少なかつた點でせう。

宮下 樺太の地元の選手も強いつか、信越選手も強いつか、青森の選手が強いつかといふことは、互は大いに將來參考になると思ふ。

高橋昂 去年の大鰐のレースと今年のレースは地勢が非常に似通ふ居たと思ふがさう思ひませんか。

長田 似てゐます。障害物が眼の前にチラツいてゐたことなどもそれだ。



近刊圖書評

北海道の山岳

北海道の山岳に關するこの種の案内書が發刊されると言ふ事は、可成多くの疑問と期待と又多少の不安とを以つて待たれて居た事である。北海道と言ふ全く未知な未開な原始風貌の多くを具へた山岳に就いての登山案内書が、その何れの點までを一樣に斑なく記載、明記し得るかは大の興味を以つて見られて居た事に違ひない。北海道の山岳の持つ觀賞的乃至はその精神的對象としての衷への擴がり等に就いては、この書は卷頭に登山案内書たる事を標記して居るので評の限りではないが、うらみを言へば、その總論の箇所まで述べて居る登山的特徴ばかりでなく、その風貌について深く觸れて欲しかった。著者達は又その顔ぶれからして、むしろその方面にも深い豊かな思想をもつた人々であるのに、この點についてそれにこと更ふれずに居る態度は、何んと言つても本書の大きな缺點であらう。又痛い所

にふれないと言ふ多少逃避的な態度ではないかとも考へられる。

私は次の諸點を本書の忘れ物或は落し物の様に考へる。

一、總論或は別に項を設けて、北海道に於ける登山の注意を特にかゝけて欲しかった。澤歩きの注意、天候上の注意等。

二、簡潔の程度が山に依つて餘り差がある事は、或意味ではこの書のねらふ「登山者の程度」を暗に示して居るとも考へられるが、本書の述べる所を樂々と理解し、登山を計畫し得るのは恐らくこの數人の著者群の人々等のみで、その點(一)に述べたものを詳しく附してあれば可成の廣さを以つて本書は役立てられるであらう。語學の辭書等にも「凡例」と「略語解」等があるではないか。

凡例の凡ならざる所を示し得ないのは本書の「若さ」の缺點であらう。

三、北海道に於ける山道の概念を示して欲しい。内地の人々には北海道の山道は全く想像外のものであるからである。

四、寫真版の不滿は恐らく私計りではないだらう。あの内容にして、あの寫真は餘りに地味ごのみを通り越しては居ないか。

五、記述の全体の心持が妙に角ばつて居る、何處かくだ  
けぬ、本心を言はないで居る所が見られる。

六、各地方の登山期の大体の天候や、雪量が大体何米位  
の程度に極概略の所を示して欲しかつた。

次の諸點に對しては著者達の努力とこの意圖に全く敬服  
するの外ないのである。恐らくこれらの長所は前言の凡て  
を隠し得るだけの價値は充分あるものであらう。

一、和して同ぜざる著者達の努力は確かに本書に或る面  
白さを與へて居る。諸外國に見る改訂に改訂を加へられた  
嚴かにも彈力を缺いた所の權威書の如き退屈さのない所は  
登山の辭書にして辭書ならざる興味を藏して居る。

二、複雑さを或程度で棄てた賢明さ。

三、スキー路の指示記述の明確。

四、坐標式に依つた山岳名の示し方(専門に逸せざる)

五、旅程表の附してある事は確かに拔群の良書たる事を  
示して居る。これらは餘程の經驗と自信がなくては作れる  
ものではない様に思はれる。一見簡單に見える旅程表の作  
成は案内書の骨格とも言ふべきものであらう。

六、澤歩きの旅程の示し方は恐らく何人と雖も、これ以  
外簡明に示す事は不可能であらう。

最後に本書の背後に見えざる力となつて居る北大山岳部

の多年の歩みと努力とに深い敬意を表して、暴言を幾重に  
も陳謝。尙本書が發刊された事は、その長所、缺點を通り  
越して確かに北海道登山界の福音である。一つの踏臺が出  
來たのである。

その意味で本書の持つ使命の大にして又深い事を考へ益  
々將來その内容を充實されて行かれん事を望む。

(長野)

◆購入圖書並に寄贈圖書雜誌

- ▲ Alpine Handbuch Bd. I. II.
- ▲ Rankin, Tour in the Hinnaayas and beyond.
- ▲ Henry Heek, Merkbuch für Schlänter
- ▲ 山 岳 第二十六年第二卷 日本山岳會
- ▲ 會 報 7・8 日本山岳會
- ▲ 山 幸 第五號第六號 神坂山岳會
- ▲ アルカウ趣味 第十八年第七號第八號 日本アルカウ會
- ▲ 山と溪谷 第七號第八號 山と溪谷社
- ▲ 蝦夷往來 第四號 札幌 尙 古 堂
- ▲ 山岳の驚異
- ▲ 北海道の山岳 札幌 田中晴林堂
- ▲ Mitteilungen des Ski-Club Schwarzwald.



## ◆山の談話會

去る九月二十六日午後六時半より札幌商工會議所に於て山の談話會を催し、札幌鐵道局工作課長羽島技師の「除雪」に關する一有益なお話を聴き、そのあとで、専ら雪に關する談話を交換して十時散會す。

出席者は、羽島技師、野崎健之助、山縣浩、徳永芳雄、宮下利三、佐々保雄、高橋昂、四手井綱彦、長野寛

因に次回は根本札幌測候所長の「北海道の雪の分布」に關する講演を聴く豫定。

## ◆「山とスキー」のバックナンバーのこと

山とスキーの會で發行した雑誌「山とスキー」のバックナンバーに就て最近頻りに讀者から照會がありますから左に一括して在庫の分と價格に就いて記します。

### 一、在庫の號數

自一號至百號迄のうち左の番號を除く外は僅少づゝ在庫してゐます。

1—11
13—14
16—17
31—34
36
38
50
63—65
67
69
72
78
79
86
89
95
99—000

### 二、價格

一部 金拾錢 送料 一部 金貳錢  
但し倍大號(77 80 92 94)は一部金貳拾錢

## 編輯後記

◆ミュンヘンのカール・ルーター氏から本誌のために何か書いて送ると言ふ手紙を貰つてから間もなく送つて來たのが本誌に掲載した「山登りについて」である。原文は二號か三號に掲載しますからそれを讀んで戴きたい。そしてこれからも時々原稿を送ると云ふたよりがありました。

◆神谷俊雄氏の「アールベルグ派の廻轉理論の疑問に就て」は原稿を手許まで届けて頂きましたが、都合で次號に掲載することにしました。筆者に對しても讀者に對しても申譯ありません。

◆秩父宮さまの御思召しによつて大倉男爵が五万餘圓を投じ、札幌神社裏の山腹に大倉組の手で工事中であつたヘルゼン中尉設計のシヤンツエは此の程に至り見事に竣工した。此シヤンツエは記念シヤンツエの背後に東を向いて瀧のやうに懸つて見えます出來上ると吾々は大倉男爵に對する感激の念で一ばいてある。此シヤンツエで今冬行はれる飛躍競技が今から待たれて仕方がないこの見事なシヤンツエの詳しい記事は、大倉組の方や北大の山野教授、廣田氏から次號に書いて貰えると思ふ。

◆鈴木重雄氏の寫眞「屏風岳」は「天狗岳」でありましたから御訂正を願ひます。編輯者の疎忽で何共申譯ありません。

◆雪に關する研究を御寄稿下さるやう皆さんに特にお願ひ致します。(長野)

武者小路實篤序  
井田清著  
詩集  
山

定價  
送料  
金壹圓五拾錢  
金六

山  
と  
雪

壹部  
金參拾錢

廣田戸七郎著  
スキージャムピング

定價  
送料  
金壹圓五拾錢  
金拾八

山  
と  
スキー  
(ナンバク)

但し倍大號は  
送部  
料部  
金貳拾錢  
金二拾錢

御希望の方は「振替」座小樽入四九五番へ

山  
と  
雪  
の  
會



武者小路 實篤序  
井田 清著

東京 陵楓山房版

詩集



限定 三百部

體裁

四六判 和紙かぶせ紙  
フランスとち・もぞう紙二百頁  
定價 壹圓五拾錢・送料 六錢

發行所 札幌 山と雪の會

札幌市北二條西十三丁目  
振替口座小樽八四九五番

# 北大山岳部々報 第三號 豫約募集

内容は北海道の登山記録を主として左の通りです。

- 一、年報 (一九二九・九一三一・九)
- 一、第零義的登山
- 一、山の嶺がりと人間化 (殊に北海道の山岳に就て)
- 一、五月の石狩岳から三國山まで
- 一、三月の 日高
- 一、ウベベサンケ山
- 一、五月の武華・武利・支湧別岳
- 一、茅刈別川よりニセイカウシユヘ山
- 一、神威 岳
- 一、五月のニベツツ山から松山温泉
- 一、冬の夕張岳
- 一、十勝川上流地方
- 一、登山スキー合宿について
- 一、水本文太郎のこと

高橋喜久司・井田清

菊判、特漉印刷紙約二五〇頁、寫眞一〇葉、圖版數葉

額 價 金一圓五〇錢 送料各一〇錢

刊行期日 十一月下旬

札幌市南五條西十一丁目相川修方

## 北大山岳部々報編輯係

振替小樽一四七七二番

當部報第二號殘部少しあります。御希望の方は御申越下さい。

### 第二號 内容

- 知床半島の山
- 幌尻岳スキー登山
- 美生岳・戸蔭別岳及幌尻岳
- 日高山脈より新冠川を下る
- トツタベツ川を登る
- ウチカウシ山を登る
- 静内川よりカムイェクウチカウシ山
- 日高山脈中ノ川地形について
- 日高山脈單獨行
- 石狩川を溯りて音更川を下る
- 十勝岳—十勝川—ニベツツ山
- 石狩岳とニベツツ山を中心にニベツツ山
- 五月の蘆別夕張連峯
- 三月の利尻岳
- 國後島遊記
- アレウシヤンの旅
- 日高山脈アイヌ語考
- 年報 (一九二八・四—一九二九・八)
- 寫眞版一二葉、スケッチ五葉、地圖三葉
- 菊判 コットン紙 三三三頁
- 頒價 金 二圓 送料各十二錢

原 忠平

須藤宣之助

星 光一

坂本 正幸

山 縣 浩

福西幸次郎

大立目謙一郎

伊藤秀五郎

河合 克己

山 縣 浩

伊藤秀五郎

德永 芳雄

山 口 健兒

井 田 清

島村光太郎

高橋喜久司

山 口 健兒



# 北大スキー部報

## 内 容

未 定	大 野 精 七
飛型審判についての随想	件 素 彦
スキー苦しみ記	三 戸 勳
感 想	廣 田 戸 七 郎
スキージャンピング及び複合競技練習法に對する私見	村 本 金 彌
追 憶	村 本 金 彌
札幌を訪れた二大スキー人の言葉	宮 下 利 三
デイスタンスレーサーとしての経験より	中 村 新 一 郎
定山溪天狗よりパラダイスへ	宇 都 宮 嵩
森林 美	宇 都 宮 嵩
スキー部の憶ひ出	向 井 一 郎
冬の北見屏風	鈴 木 重 雄
無意根小屋建設に就いて	鈴 木 重 雄
一九二九年以前のカンチエンジュンガの歴史	楠 見 正 雄 (譯)
スキー随想	楠 見 正 雄
長門スキー小屋に就て	三 浦 義 明
ヒユツテ廻り	今 井 勇 三 郎
ヒユツテを利用する札幌附近のスキーコース	伊 藤 信 康

青山温泉を中心として

飯山遠征記

諾威選手の練習法 (Dar Winter)

ワックスに就て

一九三一年度の獨逸に於ける競技記録より

手稻合宿の記

デイスタンスレースの夏季豫備練習について

未 定

樽中シャントエに於ける練習日記

寫 眞 版

一、屏 風

二、天狗(北見)

三、秩父宮殿下

四、ヒユツテノ寫眞

五、飛型(山田四郎)

六、飛型(宮村六郎)

七、飛型(山田四郎)

八、飛型(山田四郎)

九、飛型(宮村六郎)

體 裁

頁 數

寫 眞

實 價

發 行 期 日

豫 約 申 込 期 日

申 込 所

小 池 茂

奧 井 由 雄

五十嵐勝藏(譯)

宮 村 六 郎

稻 葉 忠 七 郎

西 武

山 田 四 郎

伊 黒 正 治

空 沼 長 門

中 山 無 意 根

ハルベチユア

朝 里 山 家

伊 黒 正 治

菊 判 用 紙 (コットン)

約 二〇〇 頁

札 幌 附 近

約 十 五 葉 (十 百 分)

一 圓 五 十 錢 以 内

十 一 月 上 旬

十 月 二 十 日

北 大 スキ ー 部 々 報 出 版 係

小 樽 市 稻 穂 町 西 六 丁 目 四 番 地 西 武 方

播 替 水 樽 一 一 一 番

◆「スキー」を研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆「山岳」と「スキー」に関する御寄稿と寫眞の御惠送をお願いします。

原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

定 價 金 參 拾 錢

- \* 前金御申込か、現金でなければお送りいたしません。
- \* 御送金はなるべく振替にてお願致します。
- \* 六册分前金拂込の方には送料を頂きません
- \* 前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装に同封します。
- \* 次の御送金あるまで配本を見合せます。

昭和六年十月二十日印刷  
 昭和六年十月二十五日發行  
 (毎月一回發行)

編輯者 長 野 寛  
 印刷兼 長 野 寛  
 發行者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目  
 印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十三丁目  
 發行所 山と雪の會  
 振替口座水樽八四九五番

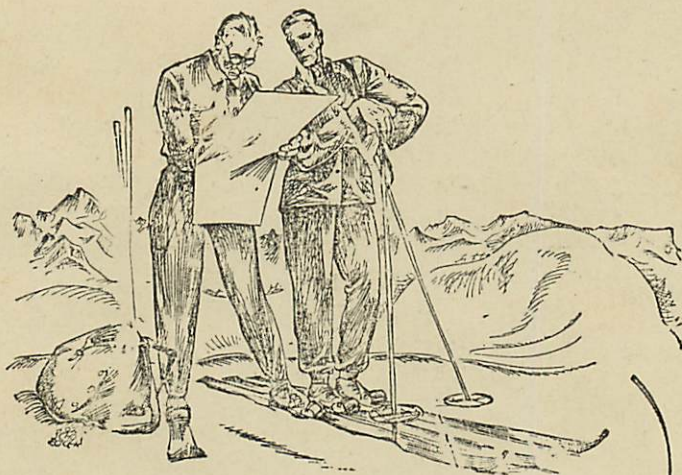


昭和六年十月二十五日  
印刷納本  
發行

山と雪

第一號

定價金三十錢



アールベルグ・スキー及び冬山の道具！  
 (純正ヒッコリー材・ロックバーチ材メープル材)  
 ビッケル、EDELWEISS印 \_\_\_\_\_  
 (鋼鐵手打製 24.27 $\frac{1}{2}$ ・30.33 $\frac{1}{2}$ cm 保証付)  
 ムックサック (スイス製布地、絶對防水)  
 スタイガイセン (鋼鐵手打製八本爪其他)  
 燃料META及びアルミ炊事具各種  
 羽毛製シュラフザック及び冬期露營用具

Artberg Ski



Hannes Schneider

(商標登録)

三越・伊東屋・白木・野澤屋

合名會社

美満津商店

東京・本郷・赤門前